新刊紹介

金倉圓照著　印度古代精神史

凡そ印度學的研究が佛教的ならざるべきは今更に言を俟たぬ。然るに我が國の印度學は我が國が佛教國であるといふことに於いて、其の殆んど凡てが佛教徒の手に委ねられ、佛教的臭味を持つてゐることは否み難いところとせられねばならない。勿論印度學に關する資料を悉皆に傳へる佛教徒の文獻が印度學に貢獻することは云ふまでもなく極めて大であり、而もそれを利用するに極めて便利な立場にある我々日本人の印度學者がそれを利用することは、又當然のことと云はねばならぬ。併し、印度學は飽迄印度學としての純粹さをもつものであらねばならぬ。

過去に於いては、我國に於いて云ふところの印度思想とは要するに佛教思想であつた。と同時に佛教思想以外は凡て外道であつて、貶棄せらるべきものとして顧みられなかつた。最近に於ける歐米の印度學的研究の進歩の輸入とともに、如上の觀點は到底維持せられなくなつたのであり、かくて我が佛教學は印度學的背景を帶びてくるに至つた。此處に我々は始めて公正な學問的態度を見ることが出來るのであるが、而も我國の佛教學研究者の大部分の中には、彼等が自ら印度の言語で記された文獻を理解し、自らの能力に依り此れを解釋するようになつたと云ふ意味に於いて印度學的背景を帶びるに至つたとは云へ、尙その間宗派根性の不識不知のあらはれがあり、又然らずとも思想の發展の追究に急なる餘り、足下を閑却して雲上の空論にも比すべき論議の蒸し返しに浮身をやつすといつた具合であることは蓋し否み難い事實と云はねばならぬ。

此の時に當つて、金倉圓照博士が自ら偏執なき日本人、謙虛な一學徒として、印度精神の眞髓を解明せんとせられて「印度古代精神史」を世に問はれたことは蓋し時宜に適した最善の處置と云はねばならぬ。

博士の新著「印度古代精神史」は章を分つこと十三、「印度精神乃至思想が如何なる經緯によつて展開し來つたか」といふことの概觀を意圖せられたものである。「精神史の黎明」期よりウパニシャッドの哲學を經て原始佛教思想までを大約四百頁に亙つて明快に叙述せられ、讀者をして一氣呵成に讀破せしめる所以のものは、蓋し博士の流麗なる筆致の下に奔濤し來つた博士の該博なる學識に外ならぬ。

博士の此の書を編述せられるや、「特に種々なる思想體系の前後の關聯に重きをおき、全精神史に於けるそれぞれの意味を明かに」せられたのであり、此の點博士は本書を以て「專門家の參考よりは寧ろ一般教養人に現在における印度精神の研究成績を報告しよう」とせられたものと云はれるけれども、敢て一般教養人のみでなく、專門の學徒（これも或種の教養人ではあらうが）にも如上の意味に於いて通觀的な智識を與へるものとして、此の書は更に高く評價せられねばならないであらう。殊に邪

命外道、ヂャイナ教に關する簡明な論述は今日まで邦文で以て記されたかゝる種類の論著が殆んどなかつたといふ點で、此の書の價値を更に更に増大するものであらう。かくて我々印度學專攻の徒は、殊に筆者の如く文獻學に重點をおいて研究してゐる者にとつては、今日までの印度思想に關する論述が餘りにも晦澁であつたといふ憾が殘されてゐたのであるが、それが此の書によつて一應解消せられるに至つた感を持つをえたことは敢て私一人のみではあるまいかと思ふ。

併し乍ら、ただ私が此處に最も殘念に思ふことは、全體的に見て本書の叙述が今日までの思想史の叙述方法と略同一の系路をとられたことである。本書の目的とせられるところが、上の如きものである故に、蓋し止むを得ざるところではあらう。併し、或は私一個の堅蜀の念ででもあらうが、博士御自身の體系の展開による印度古代精神史が、願はしう、且堅ましく感ぜられる。殊に第一章「精神史の黎明」より第三章「梵我一如」に至る間は、私自身かつてその間の思想的發展に注目したこともあり、且僭越にも今日までの諸學者の所說にいささかながら不滿の意を持つてゐただけに、尙更に博士の獨自なる見解の展開が希求せられてくるのを如何ともなし得なかつた。私は以下少しく此の點に觸れて、以て博士の御高著を厚顏にも紹介し批評する責の一端を裹ぎたいと思ふ。

我々は今日までリグ・ヴェーダより所謂後期の諸ヴェーダを經て、ブラーフマナ、ウパニシャッドへの文學史的展開とともに宗教史的・思想史的展開をおしへられてきたし、又多くの書籍を通じて知つてきた。事實此れは勁かすべからざる文化史的事實に基づく。併し此の推移を注視するとき、其處に明確に認められるものは、博士の論述の中にも明かに見られる如く、「全一への階梯」より「梵我一如(絶待の認識)」への「一」なるものへのあこがれであり、統一あるものへの流れに外ならぬ。然らば此處に云ふ「一」なるものへのあこがれ、統一あるものへの流れとは、何が「一」なるものへあこがれたのであり、統一あるものへ流れたのであらうか。而もかゝる傾はCakra-vartin の思想、adhirāja の考の中にも看取せられる。果して此の統一傾向のよつて以て由來するところは何處に求めらるべきであらうか。此處に諸先進と私との間に解釋の相違を來す。私自身の卒着なる見解を披瀝すれば、此の「一」なるものへのあこがれ、統一あるものへの流れは、所謂アールヤ的なるものと先アールヤ的なるものを結びつけんとするエロスに外ならぬ。即ち此處にアールヤ的なるものとは男性的な能勁的な力であり、先アールヤ的なるものとは女性的な受勁的なものであるからである。而して此の兩者の結合をもつて此處に始めてインド文化が醞釀せられるのである。而も此の思潮は既にリグ・ヴェーダに於いて認められるところであり、其處に於いて異民族的要素が明確にせられるとともに、所謂インド・アールヤ人の印度侵入なる事實が、侵入といふが如き破壞的事實ではなくして、相互侵潤であり、漸進融合であることが認められるのであるが、而も尙それはイ

ンド的所產ではなく、アールヤ的所產であつたことは否み得ないところである。而して其後アールヤ人の異民族との接觸面が大となるに從つてアールヤ的なるものの所產に於いて、先アールヤ的なるものが漸次クローズアップせられてくる。即ち、先アールヤ的なるものは此處に文化的價値を獲得するに至つたのであるが、此處に働きかけてゐるものがエロスなのであつて、此のエロスによつて、此の兩者は漸次結びつけられていつたと解釋せらるべきである。そして其の最初の試みがアタルヴァ・ヴェーダ乃至はヤジュール・ヴェーダの成立であり、更にブラーフマナ諸書の成立であつた。殊にブラーフマナ諸書はその思想に於いてリグ・ヴェーダ神觀の呪法的解釋の跡が明確に認められるといふことに於いて、呪法的なるものがアタルヴァ・ヴェーダの背景として先アールヤ的なるものの所產であることより考へて、上述のエロスの最初の發現として、婆羅門社會の中に成立したのであり、從つて其處には「古神の顚落」があり、又「新神の出現」があると同時に、「歪められた世界觀」が當然成立してくるのである。而も「ウパニシャッド哲學」は實に「輪廻思想と業思想」とともに、異民族的分子を多分に含む當時の王族の實力を背景として、異民族的文化要素を根幹として成立し、發展したものであることを思へば、上述のエロスの顯現は此處に完全に發揚せられたと考へられるべきである。即ち、「梵我一如」の哲學思想は實に此のエロスの咲いた思想的な滿開の花であつたのである。と同時に、ヤジュル・ヴェーダに於いて窺はれる密教的色彩（アタルヴァ・ヴェーダに見える祕密思想は原始祕密思想ともすべきであらう？）が其の後の文獻の大部分が書かれたアールヤ系の言語の文獻に殆んど記載せられることなしに、後世のグプタ王朝の頃まで民間に傳承せられてきた思想史的背景が漠然ながらも跡づけられてくるのである。而も、後世より溯つて考察するときは、既に如上の時代に於いて、後世のインド教的思想の源流があつたことが認められねばならない。

私は今此れ以上詳細に此處に述べる餘裕を持たないのであるが、兎も角上述の如く考へて來るとき、少くとも今日までの思想史發展過程の叙述は尙一方的であつたと結論せざるをえないのではないかと思ふ。私はただ博士の云はれるが如き偏執なき學徒として當時の印度思想の發展段階を公平な眼を以て觀察して、印度思想史の冒頭に於いて書直しせらるべき幾頁かがあるではないかと考へて、以上に於いてその大綱を記したのである。

金倉博士の新著を紹介し、併せて批評する責をもつた私は論述に去來して遂に此處まできてしまつたのであるが、此れを以て博士の高著を云爲しようとするものではない。私は自ら今日まで漠然と考へてきた當時の思想界の動向が、改めて博士の論述せられるところによつて明確に把握できたことを喜ぶとともに、私の如上の推論が今後更に展開せしめうべき根據を與へられたことを衷心より感謝するのみなのである。

私は此の書によつて、專門の學徒は勿論、一般教養人が印度

古代思想の全般に亙つて、或は知識を新にし、或は認識を深めるをうべきことを滿腔より喜ぶとともに、此の書によつて我々の學問に對する世人一般の理解が一歩でも前進するであらうことを切望して止まぬ。（東京岩波書店發行、定價三・六〇）—岩本裕。

講義題目

京都帝國大學文學部哲學科　昭和十四年度

哲學

普通　田邊　教授　哲學概論
特殊　田邊　教授　實存哲學對現實哲學
同　高山助教授　歴史の一回性と普遍性
同　下村　講師　黎理哲學の根本問題
演習　田邊　教授　Hegel: Phänomenologie des Geistes. Der Geist.（前學年の續き）

西洋哲學史

普通　山内　教授　西洋古代及中世哲學史
同　九鬼　教授　西洋近世哲學史
特殊　山内　教授　Pathos と Pothos.
同　九鬼　教授　現代哲學の動向
演習　山内　教授　Plato: Cratylus.
同　九鬼　教授　Bergson: L'Évolution Créatrice.（前學年の續き）

印度哲學史

普通　本田　教授　印度哲學史
特殊　本田　教授　吠檀多思想
同　山口　講師　四百觀論の研究
演習　本田　教授　Sarvadarçanasaṁgraha, IV.

支那哲學史

普通　小島　教授　支那思想史
特殊　小島　教授　支那に於ける法の概念
同　重澤　講師　春秋繁露研究
演習　小島　教授　周禮注疏

心理學

普通　野上　教授　心理學概論
特殊　野上　教授　老年期の心理
同　高木　講師　學習の問題
同　岡　講師　ヴント以後の心理學
同　園原　講師　適性の心理學（臨地實習を伴ふ）
演習　野上　教授　W. James: Varieties of Religious Experience.（前學年の續き）
實習　園原　講師　甲、心理學實驗　普通過程（一回生）
乙、心理學實驗　特殊過程（甲修了者に課す）

倫理學